

「阿蘇わくわく自然体験塾」

[主催] 国立阿蘇青少年交流の家

[後援] 熊本県教育委員会 阿蘇市教育委員会

[実施期間・参加者]

〈3校学校ふれあい交流編〉

平成25年7月4日(木)

- 熊本県立大津支援学校 生徒30名, 引率者13名
- 熊本県立小国支援学校 生徒18名, 引率者10名
- 熊本県立菊池支援学校 生徒23名, 引率者12名

〈阿蘇自然ふれあい体験編〉

平成25年7月5日(金)

- 熊本県立菊池支援学校 生徒23名, 引率者12名

〈学校ふれあい交流編〉

平成25年9月26日(木)～27日(金)

- 熊本県立大津支援学校 生徒31名, 引率者13名
 - 熊本県立小国支援学校 生徒18名, 引率者11名
- ボランティア11名

[実施場所] 国立阿蘇青少年交流の家

[事業担当者会議構成員]

熊本学園大学社会福祉学部社会福祉学科	准教授	相藤 絹代 氏
九州ルーテル学院大学人文学部心理臨床学科	准教授	佐々木順二 氏
熊本県立大津支援学校	高等部主事	岩切 昭仁 氏
熊本県立小国支援学校	高等部主事	山内雄一朗 氏
熊本県立菊池支援学校	高等部主事	上園 宗徳 氏

1 趣 旨

「特別な支援を要する児童・生徒を対象に、阿蘇の大自然の中で自然体験や社会体験、交流体験をとおして、豊かな心を育成する場を提供する。」という特別支援学校と青少年教育施設の連携事業プログラムの開発を行う。

2 目 標

- (1) 様々な自然体験活動をとおして、自然に親しもうとする心を育成する。
- (2) 多くの仲間やボランティアとの幅広い交流活動や発表活動等をとおして、コミュニケーション能力を育成する。
- (3) 班活動や集団での宿泊体験をとおして、仲間と協力して楽しく活動しようとする心を育成する。

3 事業展開

(1) 研修プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
ふれあい交流 3校学校編					開会式	フロアー ホッケー 交流会	昼 食	共同作業 (メッセージと 葉っぱの こすり出し)	開会式	入所式・OR	部屋移動	夕 べの 集い	夕 食	リハ ーサル	キャンドルの つどい	入 浴	就寝準備
ふれあい交流 阿蘇自然編		朝 食	退所準備	退所点検	自然散策 自然の中の色さがし	退所式	昼 食	退 所									
学校ふれあい交流 編					開会式	野外調理 ピザ作り		自然物を使って、 思い出の写真立て を作ろう		フロアー ホッケー 交流会	休 憩	夕 食	休 憩	入 浴	修学旅行の 話し合い	就寝準備	
	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
		朝 食	退所点検	お別れ セレモニー 退所式	自然散策	昼 食	フライング・ディスク	退 所									

(2) 目標達成のための工夫

① 自然を生かした体験活動の充実

キャンプ場に落ちている葉っぱの葉脈を紙に写し取り、それを使ってメッセージカードを作成した。このメッセージカードの作成にあたっては、学校間の交流が十分図られるように、葉脈を写し取った紙を台紙に貼り付ける作業は混合班で行い、メッセージを書く活動はそれぞれ学校ごとに分かれて書くようにした。メッセージには、「またフロアーホッケーをしましょう。」「友だちになってくれて、ありがとう。」など、心温まる内容が書かれていた。また、木の実などを使った写真立て作りでは、活動する中で親しくなった友だちの木の実を選んであげたり、アドバイスをしたりするなどの様子が見られた。出来上がった写真立てを大事そうに抱え、じっと眺めている生徒の姿が印象的だった。

自然散策では、自然の中の色探しやビンゴゲームをした。今回はキャンプ場周辺の草花を使ってビンゴカードを作成した。生徒はキャンプ場に移動している途中も草花に目を向けており、ビンゴゲームに対する関心の高さが伝わってきた。ビンゴの中にある草花を見つけると歓声があがり、大変盛り上がっていた。ビンゴカードを活用することによって、自然に目を向けさせるよい機会を提供することができた。

② コミュニケーション能力を育成する場の設定

今回の交流事業においてコミュニケーション能力を育成する上で留意したことは、いかに自然な形で生徒同士がコミュニケーションをとれるようにするかである。そこで、本年度はプログラムの中に昨年度行った修学旅行発表会に加えて、アスパラガスなど阿蘇の野菜を使ったピザ窯でのピザ作りを位置づけた。ピザ作りは混合班で行い、一緒に



交流ピザ作り体験

ピザ生地をこねたり、分担して野菜を切ったりするなど、会話をしながら協力してピザ作りに参加する様子が見られた。出来上がったピザの味は格別だったようである。

夜に行われた修学旅行発表会では、9月に修学旅行を終えた小国支援学校の生徒が模造紙に貼った写真を見せながら、修学旅行のスケジュールに沿って感想を交えながら発表した。その後、質問や感想を述べる時間を設定した。大津支援学校の生徒が小国支援学校の発表を聞いて進んで質問し、その質問に対して小国支援学校の生徒が自分の言葉で答えていた。小国支援学校の修学旅行の発表は、11月に修学旅行をひかえている大津支援学校にとって、よい刺激になったようである。

③ 仲間と協力して楽しく活動するためのスポーツ交流

昨年度からプログラムに取り入れたフロアホッケーは、特別支援学校の先生、生徒ともに好評だったこともあり、本年度も昨年度に引き続き、スポーツ交流として実施することにした。

昨年度は大津支援学校と小国支援学校の2校での交流だったが、本年度は新たに菊池支援学校が加わり、3校でのスポーツ交流が実現した。運動能力等を考慮し、個に応じた交流が十分できるように、グルーピングは各校の高等部主事の先生に依頼した。

パック集めやシュート練習、3校混合チームによる簡単な試合などを、3箇所に分かれて行った。菊池支援学校の生徒にとってフロアホッケーは初めての経験だったが、仲間にパスを出したり、シュートをねらったりして意欲的に取り組んでいた。小国支援学校の生徒は、他の2校の生徒にパックの運び方やルールを丁寧に教えていた。小国支援学校の生徒のほとんどが他の2校の生徒にシュートを決めさせようとゴール前で丁寧なパスを送っており、心温まる姿が見られた。会場はシュートが決まるたびに、大きな歓声と拍手が起こり、学校の枠を超えて和やかな雰囲気の中で交流を深めることができた。

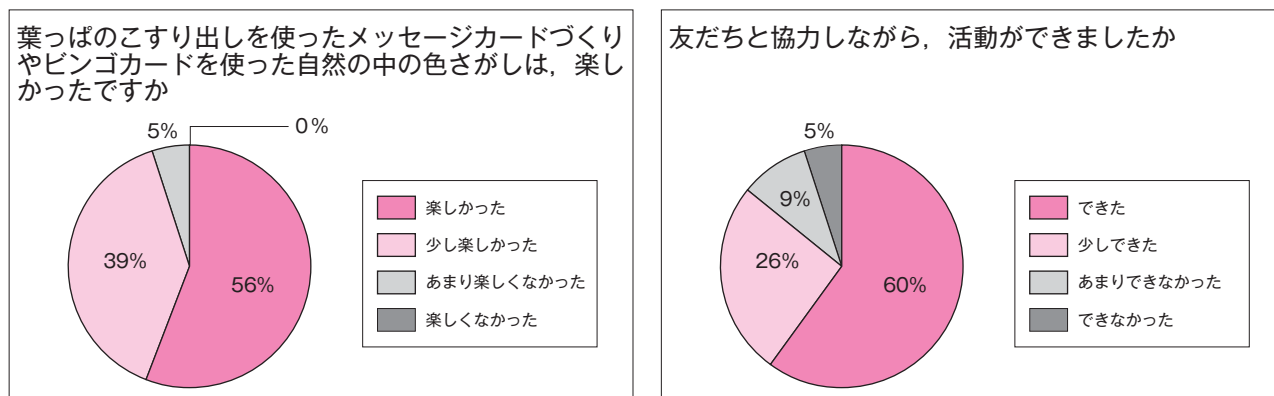
なお、大津支援学校と小国支援学校は、9月に行われた2回目の交流事業においてもフロアホッケーに取り組んでいる。



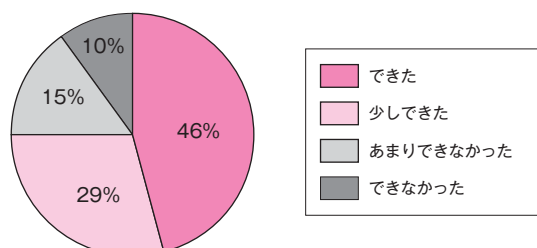
4 結果

アンケートの結果は次のとおりである。

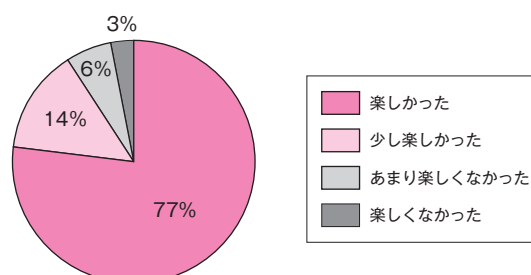
〈生徒へのアンケート〉



たくさんの人とあいさつや話ぐできましたか



3校でのフロアホッケーは、楽しかったですか



【参加者の声（アンケート記述）】～抜粋～

- 友だちになってくれて、ありがとう。
- 昨日はとても楽しかったです。また、交流があつたら、声をかけてください。
- 小国支援学校と菊池支援学校のみんなとフロアホッケーができて、とても楽しかったです。また、フロアホッケーをやりましょう。
- お弁当を一緒に食べられて、とてもうれしかったです。おにぎりがおいしかったです。
- 阿蘇までバスで遠かったです。私は、わくわく自然体験塾で小国支援学校と菊池支援学校のみなさんとフロアホッケーをしました。実際に、小国支援学校の先輩たちの腕前を見て、さすがプロだなと思いました。僕はキーパーでしたが、小国支援学校の先生が「ナイスキーパー」とほめてくださったので、とてもうれしかったです。ありがとうございました。
- 楽しかったです。9月に会えるのを楽しみにしています。
- 私は初めて小国支援学校や菊池支援学校と交流ができて、本当によかったです。次の交流活動を楽しみにしています。
- 次は、あいさつやお話ができるように頑張ります。話をいっぱいしましょう。

5 成果と課題

(1) 成 果

- ① 本年度は事業の目的を達成するためのプログラムを開発するために、事業担当者会議を開催した。会議には、熊本学園大学の相藤先生、九州ルーテル学院大学の佐々木先生、3校の高等部主事の先生方に出席していただき、生徒の実態に即したプログラム開発になるように意見を出していただいた。本事業の実施に当たっては、大津支援学校、小国支援学校、菊池支援学校の3校の全面的な協力を得て実施、検証を行ってきた。参加者のアンケート結果を見ると、今回実施したプログラムに参加した生徒の満足度は高く、日頃、交流する機会が少ない特別支援学校の生徒にとって、本事業の活動すべてが貴重な交流の機会になったものと考えられる。
- ② 事業後に行ったアンケートの「葉っぱのこすり出しを使ったメッセージカードづくりやビンゴカードを使った自然の中の色さがしは楽しかったですか。」という質問項目において、「楽しかった」「少し楽しかった」と答えた生徒が95%だった。このことから、自然を生かした体験活動を交流プログラムの中に位置づけることは、生徒の身の回りの草花等に対する興味や関心を高めるとともに活動意欲を高める上で有効であるといえる。
- ③ ピザ作りや修学旅行発表会等の交流活動をととして、意図的に他校の生徒や先生とコミュニケー

ションが図られる場を設定した。多少個人差はあるものの、生徒は自分の言葉で意思を伝えようとする姿が見られた。

- ④ フロアホッケーによるスポーツ交流において3校混合班で活動させたことは、チームとして一体感をはぐくむとともに、学校の枠を超えて温かい人間関係を築くことにつながった。また、3校の先生方にスポーツ交流の良さを実感してもらうことができた。

(2) 課 題

本事業も早いもので4年目となった。本年度は新たに菊池支援学校が加わり、3校での交流体験を中心としたプログラムを提供することができた。今後は本年度の成果と課題を踏まえつつ、できるだけ各特別支援学校が主体となって交流活動が展開できるように、プログラムの提供とともにボランティアの確保など人的支援体制の充実を図っていきたい。